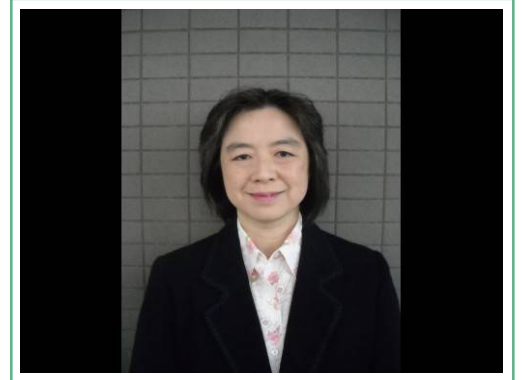


読売新聞社賞 優秀賞 3級

神奈川県 平井英子さん



日本語検定（語検）を教えてくれたのは、息子だった。

一昨年春、中学生になった息子は、真新しい教科書と一緒に語検のテキストを持ち帰った。息子が入学した学校では、語検を国語の年間カリキュラムに組み入れており、定期試験ごとに1領域ずつ勉強して、本試験を団体受験するというシステムになっていたのだ。

子供の頃から国語好きだった私は、息子より先にこのテキストに飛びついた。それまで語検を知らなかったわけではな
いが、残念ながらテキストを手にしたのはこの時が初めてだった。5級のテキストは、「勉強」を離れて久しい私にもわ
かる内容だった。そこで私は、語検の家庭教師役を買って出た。反抗期も始まり、なかなか親子の会話が成り立たない中
で、語検の勉強時間は貴重な親子のコミュニケーションタイムになった。

幸い、息子は他の友人に遅れることなく合格し、2年生になった昨年の4月、今度は4級のテキストを持ち帰ってきた。
「また楽しい勉強ができる」と内心喜んだのだが、反抗期の壁は厚く、「共同学習」はあっさり拒否された。そこで私
は、「反抗期に反抗してやろう」と一念発起、息子より一級上の3級をめざしての勉強を始めたのだ。

勉強というものから遠ざかっていた身に、「本格的な試験勉強」は難しかった。特に苦労したのは、「語彙」と「言葉
の意味」の領域だった。日常的によく使う言葉ばかりだったが、慣用的に使っている語句の厳密な意味を正確に理解して
いなかったことに改めて気付かされた。これまで、多少なりとも「国語」というものに自信を持っていた身には辛い現実
であった。そこで、「類義語・反対語辞典」や「慣用語辞典」を手元に揃え、手があけば眺める（とても読みこなす時間
はなかったので、文字通り眺め、ふと目に留まった語句の説明を精読する）ことを日課とした。

そして、試験は行われた。結果は、1級違いとはいえ、親子揃っての合格だった。2枚並んだ合格証は、「ともに合格
できたこと」の喜びであると同時に、「こんなに勉強から遠ざかった身でも、その気になれば合格できるのだから、あな
たも頑張りなさい」という、息子への励ましになったと思った。

しかし、息子の言葉は辛辣だった。「ふん、自慢かよ」の一言だった。これにはショックだった。最初は対抗意識だっ
たが、試験が終わる頃には、「この経験を息子の次の受検につなげられれば」という親心のつもりだった。しかし、息子
の目には「対抗意識のかたまり」にしか映らなかったのかもしれない。あるいは、私の深層心理を見透かされていたの
かもしれない。私の気持ちは揺れた。この試験を受けたこと自体を後悔もした。試験直後に購入した2級のテキストも、本
棚の端に押し込めてしまった。

それでも、「時」は魔法だ。時間がたつにつれ、勉強の日々が懐かしく感じられるようになったのだ。息子の手元には、
私が使っていたのと同じ3級の問題集が届いた。「それならば」と気持ちを切り替えることにした。今度は息子を言い訳
に使わず、自分を磨くために勉強しよう。私は、忘れかけていた2級の問題集を取り出した。

2級は、3級とはくらべ物にならないほど難しい。題材となる語句や表現も、日常会話では素通りしてしまうようなも
のが多くなる。それでも、賽は投げられた、歩き始めた道は、前に進むしかないのである。頂上にたどり着くことは無理
かもしれないが、それでも一歩ずつ、研鑽を積んでいきたい。

自分のために。